

5. 地震の起こり方に注意しましょう

2016年4月14日に起こった熊本地震では、当初、気象庁は、マグニチュード6.5の最初の地震が本震であると判断しました。しかし、実際にはその28時間後に、マグニチュード7.3の本震が起こりました。最初に起こった地震は前震だったのです。そして前震と本震による住宅の全壊・倒壊で、それぞれ7名および30名が亡くなりました。

一度地震で傷がついた住宅は、つぎの揺れで壊れやすいのです。その後、10月末までに震度1以上の余震が4,000回以上発生しました。

このように、熊本地震は、前震、本震および余震から構成されていることが後でわかりました。しかし、奈良盆地断東縁層帯地震ではどのような地震の起こり方をするのかを事前に予測することはできません。そこで、地震の犠牲にならないためには、地震で被災した住宅にそのまま住み続けることは危険です。応急被災度判定によって、安全が確認できるまでは指定避難所にいましょう。

	高齢化率	負傷率*
1995年阪神・淡路大震災	15	1
2004年新潟県中越地震	24	1.6
2007年能登半島地震	47	2.8
2007年新潟県中越沖地震	27	4.8
2016年熊本地震	33	0.3

* ここで、負傷率とは、負傷者数を住宅の全壊・半壊棟数で割った値で定義し、阪神・淡路大震災を基準にした。

上の表は、阪神・淡路大震災の負傷率を1として、その後に起こった地震災害の負傷率と比較したものです。これから、3つのことがわかります。

1. 上から3つの地震災害のデータの比較から、高齢化が進むと負傷率が大きくなる。
2. 新潟県の地震は3年の間隔で起きたが、柏崎市では中越地震時に震度5弱を経験して被災した住宅は、3年後の中越沖地震で震度6強が襲うと、間髪を入れずに壊れたために、負傷率が3倍に激増した。
3. 熊本の地震では、震度7が28時間差であったために、最初の地震で多くの人が避難所に避難し、一部の人しか壊れた住宅に戻らなかったために、むしろ負傷率は小さくなっている。